九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「state類事態の時間構造」再考 : 英語 ”know”, 日本語「知る」, スペイン語 ”saber” の対照研究(下)

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1546591

出版情報：言語文化論究. 35, pp.43-56, 2015-11-24. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

「state 類事態の時間構造」再考

――英語 “know”, 日本語「知る」, スペイン語 “saber” の対照研究――(下)*

山　村　ひろみ

5.「知る」, “saber” に特有の振る舞い：テンス・アスペクトに注目して

前節では日本語「知る」、スペイン語 “saber” のテンス・アスペクトの振る舞いに共通に見られる特徴を見た。本節では、逆に、それぞれの動詞に特有と思われるテンス・アスペクトの振る舞いを見ていく。

5.1.「知る」に特有の振る舞い

5.1.1. 肯否と「知ル」「知っタ」の解釈

「知る」に特有のテンス・アスペクトの振る舞いについては、まず、その「ル」形、「タ」形の解釈が肯定・否定で異なるという点を指摘しなければならない。3.1.で見たように、「知る」の肯定の「ル」形は「知る」という事態が発話時以降に成立することを表すが、その否定は発話時において「知らない」という状態が存在することを表す。以下、3.1.の例を再掲する。

(22)(=10) a. ?私は近いうちにそれを知ル。
a.' *私は今それを知ル。
b. *私は近いうちにそれを知ラナイ。
b.' 私は今それを知ラナイ。

一方、「知る」の「タ」形の肯定は「知る」という事態が過去において成立したことを表すが、その否定は「知る」という事態が過去において成立しなかったという完結相の解釈と「知らない」という状態が過去において存在したという継続相の解釈の両方が可能である。以下の例を参照されたい。

(23) 私はそのときそれを知っタ。
(24) a. 私はそのときまでそれを知ラナカッタ。
= No lo supe (ps.) hasta entonces.
= No lo sabía (imp.) hasta entonces.
b. 私はそのときそれを知ラナカッタ。
= No lo sabía (imp.) entonces.
= No lo supe (ps.) entonces.

(23) から「知る」の「タ」形の肯定は発話時以前に「知る」という事態が成立したことを表すの

が分かる。一方、その否定である「知ラナカッタ」を対応するスペイン語表現と比較してみると、二つの異なる解釈が可能であることが分かる。

まず、(24a) の「私はそのときまでそれを知ラナカッタ」における「知ラナカッタ」はスペイン語 “saber” の ps. である supe と imp. である sabía の両方に対応可能で、前者は「知る」という事態が hasta entonces（そのときまで）が示す時点までに成立しなかったこと、すなわち、その時点まで「知らない」状態から「知っている」状態への変化が成立しなかったこと、また、後者は hasta entonces（そのときまで）が指す過去において「知らない」状態が存在していたことを表す。

一方、(24b) の「私はそのときそれを知ラナカッタ」もスペイン語 “saber” の imp. である sabía と ps. である supe の両方に対応可能である。このとき imp. の sabía は「知らない」という状態が既定の過去時、すなわち、entonces（そのとき）が指す過去において存在していたことを表し、ps. の supe は entonces（そのとき）が指す時点において「知る」という事態が成立しなかったことを表す[1]。つまり、日本語の「知ラナカッタ」には、発話時以前に「知らない」状態から「知っている」状態への変化が成立しなかったという解釈と発話時以前の時空間で「知らない」状態が存在していたという解釈があるということである。

5．1．2．肯否と「知っテイル」「知っテイタ」の解釈

次に、同じく「知る」の「テイル」形および「テイタ」形のテンス・アスペクトの振る舞いについて見てみると、その肯定には制約はないが、その否定には強い制約が働くことが分かる。以下の例を参照されたい。

(25) a.　私はそれを知っテイル。
　　b. *私はそれを知っテイナイ。　　Cf. 私はそれを知ラナイ。
　　c'. ?私はそれしか知っテイナイ。　Cf. 私はそれしか知ラナイ。
　　c''.?私は何も知っテイナイ。　　Cf. 私は何も知ラナイ。

(25) の例の主語は「私」であるが、(25a) が示すように、その肯定「知っテイル」には何の制約もなく、「知る」という事態が成立した後の結果状態が発話時において存在することを表す。しかし、その否定である (25b) は非文となり、「知っテイル」の否定を表すには「知ラナイ」を使わなければならない。しかし、このように制約のかかる「知っテイナイ」でも、(25c') (25c'') のように、「知る」の直接目的語にその限定を示す語が付加されると文法性が増すように思われる[2]。

また、「知る」の継続相の否定に見られる制約は、次の例が示すように、主語が「私」以外の人を指示し、「まだ」のような事態の完了性を示唆する副詞が付加されるとより緩和される[3]。

(26) a.　花子はそれを知っテイル。
　　b. ?花子はそれを知っテイナイ。　Cf. 花子はそれを知ラナイ。
　　b'.　花子はまだそれを知っテイナイ。

さらに、この否定の制約は「ル」形よりも「タ」形において緩和されるように見える。以下の例を参照されたい。

(27) a.　私はそれを知っテイタ。

a'. *私はそれを知っテイナカッタ。　Cf. 私はそれを知ラナカッタ。
a".?私はまだそれを知っテイナカッタ。　Cf. 私はまだそれを知ラナカッタ。
b.　花子はそれを知っテイタ。
b'.　花子はそれを知っテイナカッタ。
b".　花子はまだそれを知っテイナカッタ。

「知っテイタ」は「知る」という事態が成立した後の結果状態が発話時以前において存在することが表すが、その否定である「知っテイナカッタ」は、(27a") (27b') (27b") が示すように、「知っテイナイ」に比べて制約が緩い[4]。

ここまで、「知る」の継続相、「知っテイル」「知っテイタ」の肯否とそのテンス・アスペクトにおける振る舞いを見てきたが、その結果は次のようにまとめられる。

まず、「知る」の継続相の肯定は「ル」形、「タ」形の区別なくどちらも文法的である。そのうち「知っテイル」は「知る」という事態が成立した後の結果状態が発話時において存在することを、また、「知っテイタ」は「知る」という事態が成立した後の結果状態が発話時以前において存在することを表す。

一方、「知る」の継続相の否定は、意味的には「知る」という事態が成立した後の結果状態が発話時あるいは過去において存在しないことを表すはずであるが、この「知る」の継続相の否定の出現には強い制約がかかる。しかし、この制約は次のような場合に緩和される。①「知っテイナイ」「知っテイナカッタ」の直接目的語に「しか」「何も」のようにその量を限定する語が付加されたとき、②「知っテイナイ」「知っテイナカッタ」の主語が発話者以外のとき、③「知っテイナイ」「知っテイナカッタ」に「まだ」のような副詞が付加されたとき、④「知っテイナカッタ」のように「タ」形のとき[5]。

このうち①と③については、次のように考えられる。まず、「知る」の「テイル」形、「テイタ」形が表す結果状態が極めて不可逆性の強いものであるということである。つまり、いったん「知る」という事態が成立すれば、その結果である「知っている」という状態は簡単には元には戻らない、それゆえ、特に、「知っテイル」の否定である「知っテイナイ」は出現しにくいのではないか。他方、そのような情況の中で、「しか」と共起すると「知っテイナイ」が許容されやすくなるのは、この「しか」が否定極性辞で、意味的には、結局、「しか」が係る要素のみを「知っテイル」ことを表すことになるからではなかろうか。また、同様に、「何も」と「知っテイナイ」との間に親和性があるのも、それが否定極性辞であることに因ると思われる。さらに、「まだ」と「知っテイナイ」が共起しやすいのは、「まだ」が何らかの前提に基づき（ここでは「知っテイル」が示す状態を前提とした上で)、その前提と実際のズレを表示する副詞であることと関係すると思われる[6]。

一方、②と④の解釈は難しい。②については、先行研究でも指摘されてはいるが、その理由については言及がない[7]。ただ、久野・増永（1983: 116）の言うように「「知ラナイ」は、知識の欠如を、その主体（主語）の内側から見て記述した表現であり、「知っテイナイ」は、知識の欠如を、外側から客観的に観察して記述した表現である」とするならば、主語が「私」以外の場合に「知っテイナイ」が出現しやすいというのは、「テイル」形に特有の現象描写的機能と関係すると考えることができるかもしれない[8]。それに対して、④は管見の限り先行研究では指摘されていないもので、その解釈も難しい。しかし、例えば、５．１．１．で見たように、「知っテイナカッタ」に対する「知ラナカッタ」にはスペイン語の “saber” の ps. に対応する完結相の意味（すなわち、「知る」という事態が過去において成立しなかったという意味）とスペイン語の “saber” の imp. に対応する継続相の意味（す

なわち、「知る」という事態成立後の「知っている」という状態が過去において存在しなかったという意味）の２つがあるという点に注目すれば、「知っテイナカッタ」は「知ラナカッタ」が合わせ持つ完結相の意味と継続相の意味のうち、継続相の意味を引き受けたものと考えることができるかもしれない[9]。

５．１．３．「知りツツアル」「知りツツアッタ」の解釈

５．１．１．では、「知ル」「知っタ」が「知る」という事態の成立を表すことを見た。このことは日本語の「知る」の時間構造に開始点が存在することを示唆するものであるが、それは「知る」が「ツツアル」「ツツアッタ」というアスペクト形式に前接可能であること、また、「知りツツアル」「知りツツアッタ」が意味する内容によっても支持される。以下の例を参照されたい。

（28）私（花子）はそれを知りツツアル / 知りツツアッタ。

（28）の例が示すように、「知る」は「ツツアル」「ツツアッタ」というアスペクト形式と共起可能である。しかし、その可能性は、以下の例が示すように、「知る」の直接目的語の性質により異なってくる。

（29）a. *私（マリア）は太郎のアドレスを知りツツアル / 知りツツアッタ。
　　b.　私（マリア）はその事件の真相を知りツツアル / 知りツツアッタ。
　　c. *私（マリア）は日本語を知りツツアル / 知りツツアッタ。

上の例のうち「ツツアル」「ツツアッタ」と共起した（29b）が意味するのは、主語の指す人が「その事件の真相」を完全に獲得する過程にある（あった）ということである。換言するならば、「知る」に「ツツアル」「ツツアッタ」が後接すると、「知る」という事態の未成立から成立への過程が表されるということになる。このとき重要なのは、当該事態の未成立から成立への過程が表されるには必然的にその事態の成立点が仮定されていなければならないということである。つまり、（29b）の文法性は「知る」の時間構造にその成立点が存在するということの証拠となっているのである。

しかしながら、（29a）（29c）が示すように、直接目的語の種類によっては「知る」と「ツツアル」「ツツアッタ」との共起が不可能になる。これらの例が非文になる理由は次のように考えられる。（29a）が非文になるのは、４．１．で見たように、「太郎のアドレス」という情報の獲得瞬時性が「ツツアル」「ツツアッタ」の表す過程という概念と相容れないためであろう。一方、（29c）が非文になるのは、先に見たように、「日本語」が「知る」の直接目的語のときには「知ル」「知っタ」という表現も非文になるということと関係する。すなわち、「日本語を知る」という事態が「ル」形、「タ」形と親和性がないということは、その事態の未成立から成立への変化が明示的でないことを意味し、それは、「ツツアル」「ツツアッタ」による表出に不可欠なその事態の成立点の曖昧性に繋がり、結果、「ツツアル」「ツツアッタ」による表出も不可能になると考えられるのである。

５．２．“saber” に特有の振る舞い

５．２．１．presente と未来時の関係

次に、スペイン語の “saber” に特有のテンス・アスペクトの振る舞いを見てみよう。

まず、指摘しなければならないのは、一般にスペイン語の presente（現在形）は未来時にも言及

すると言われているにも拘らず、“saber” の presente にはそれが難しいという点である。以下の例を参照されたい。

(30) a. *Un día de estos lo sé (pres.).
近いうちに私はそれを知る。
a'. * Un día de estos María lo sabe (pres.).
近いうちにマリアはそれを知る。
Cf. ¿Cuándo sabes (pres.) el resultado? あなたはいつその結果が分かるの。
(http://www.foropicos.net/foro/viewtopic.php?f=5&t=6668&start=7)
b. Un día de estos lo sabré (fut.).
近いうちに私はそれを知る。
b'. Un día de estos María lo sabrá (fut.).
近いうちにマリアはそれを知る。

(30a) (30a') はその主語の人称に拘らず、“saber” の presente が未来時に言及しないことを示している。確かに、参照の例が示すように、“saber” の presente が未来時に言及することは皆無とは言えないがその頻度は極めて低い。一方、(30b) (30b') はその主語の人称に拘らず、“saber” が未来時に言及するには、その futuro（未来形）が使われることを示している。なお、この “saber” の futuro による表出は発話時以降に “saber” という事態が成立することを意味することから、発話時以前に “saber” という事態が成立することを表す ps. と鏡像関係にあると言える。

5．2．2．pretérito perfecto simple の特異性：主語が 1 人称の場合

また、“saber” は、その ps. の主語が発話者を指す 1 人称のとき、次に見られるような特異性を見せる。

(31) a. Yo lo supe (ps.).
私はそれを知った。
b. Yo no lo supe (ps.).
私はそれを知らなかった。
b'. Yo nunca lo supe (ps.).
私は決してそれを知らなかった。
b". Yo no lo supe (ps.) hasta (que) ...
私はそれを…まで知らなかった。→　私は…のときにそれを知った。

3．2. で見たように、“saber” の ps. による表出は「知らない」状態から「知っている」状態への変化を表すが、(31b") が示すように “saber” の主語が 1 人称の場合の否定は、必ずしもその変化の未成立を意味しない。もちろん、(31b') の *nunca*（決して…ない）のような否定の副詞のみを伴った場合は当該事態の未成立を表すが、少なくとも本稿の CREA による検索によれば、その多くは (31b") が表すように、結局は、当該の情報を獲得した、つまり、“saber” が表す事態が成立したことを表す[10]。

このように “saber” の主語が 1 人称のときの ps. の否定が実際には肯定の解釈になるという現象

は、先にもみたように、“saber” の直接目的語が示す情報内容を知っている発話者自身が、その情報内容の獲得を否定するというのは論理的矛盾になるからだと考えられる[11]。この傾向は、特に、直接目的語が que に導かれた従属節の場合に観察されるが、中には次の例のように、明らかにその傾向に反するものもある。

（32） Cerré los ojos y no supe（ps.）que me estaba durmiendo, aunque sabía（imp.）que estaba empezando a amanecer.（CREA, El palomo cojo）
私は眼を閉じたが自分が眠り込んでいることを知らなかった、夜が明けつつあることは知っていたが。

（32）の問題部分を直訳すると「私は自分が眠り込んでいることを知らなかった」になるが、この「知らなかった」は日本語では「分からなかった」「気づかなかった」にした方が落ち着くであろう。つまり、スペイン語の *no supe que...* という文が文字通り “saber” の未成立を表すのは、従属節の内容が他者からの伝達情報ではなく発話者自身の認識であるときということになる。

ところで、“saber” の主語が同じ 1 人称でかつ同じ過去に言及する imp. の否定はどのような振る舞いをするのであろうか。以下の例を参照されたい。

（33） Durante ese tiempo pasó inadvertida e inluso un vendedor de abetos le regaló una ramita de acebo. “Pero yo no sabía（imp.）que era ella”, dijo después.（CREA, ABC 24/12/1983）
その間クリスティーナ王女はそれと気づかれず、しかもモミの木の行商人は彼女にモチノキの小さい束を彼女にプレゼントまでしたのだ。「でも私は彼女がクリスティーナ王女だなんて知りませんでした」と彼は後に語った。

スペイン語の “saber” の否定の ps. と imp. の違いは日本語には直接反映されず、いずれも「知らなかった」と訳される。しかし、スペイン語 “saber” の否定の ps. と imp. の意味するところは大きく異なる。これまで見てきたように、“saber” の ps. による表出は “saber” という事態の成立、すなわち、発話時以前に、主語において当該情報を「知らない」状態から「知っている」状態への変化が起こったことを表すが、その imp. による表出は、ある過去において、“saber” という事態成立後の「知っている」という状態が主語において存在していることを表す。このことを山村（1999）が提示したスペイン語の imp. の機能に従って解釈すると次のようになる。

山村（1999）によれば、スペイン語の imp. は当該事態が既定の過去時に対して同時的関係にあることを表す。そして、この同時的関係の表示というのは、当該事態が発話時に対して同時的関係にあることを表す presente と共通するため、結局、スペイン語の imp. の機能は presente のそれと並行関係にあり、両者の違いはただその同時性が関係づけられる基準時の違いにあるということになる。このことを踏まえて、主語が 1 人称、すなわち、「私」が主語の場合の “saber” の imp. の否定が意味するところを解釈すると、それは、「私」が主語の場合の “saber” の pres. の否定が発話時において「私」が当該情報を獲得していない状態にあることを表すのと同じく、ある過去の時点において「私」が当該情報を獲得していない状態にあったことを表すということになる。ここで注目すべきは、“saber” の imp. の否定は ps. の否定とは異なり、当該情報の獲得の成立・未成立を問題にはせず、現在当該の情報を獲得している発話者が過去のある時点でそれを獲得していない状態にあったことを表しているに過ぎないという点である。言い換えるならば、*no sabía*（imp.）*que...* には *no supe*

(ps.) *que*... に見られたような論理的矛盾が発生しないのである。“saber” の imp. の否定が “saber” の ps. の否定に比べ頻度も高く、*hasta* (*que*)... (…まで) といった特定の副詞句と共起することも少ないのも、このような “saber” の imp. の意味するところに因ると考えられる[12]。

5．2．3．estar+sabiendo の可能性

さて、3．2．では “saber” が “estar+gerundio” と相容れないことを見たが、これについては注意が必要である。以下の例を見られたい。

(34) a. *Estoy/Está/ sabiendo la dirección.
私は / 彼はそのアドレスを知りつつある。
b. Desde hace unos días estás sabiendo demasiadas cosas. (Gómez Torrego 1988:146)
数日前から君はあまりに多くのことを知りつつある。
c. ahora se está sabiendo que este tipo de centrales no son muy rentables,
(http://www.tiempos-modenos.net/2010/01/nucleares-si-pero-en-extremadura.html)
今このタイプの発電所はあまり収益性がないということを人は知りつつある (ということが知られつつある)
d. Si hubiera sabido todo lo que estoy sabiendo, ... (CREA, Iglesia y Dictadura, Chile, 1986) (あのとき) 私が知りつつあることを全部知っていたなら

上記の (34b) から (34d) の例が示すように、“saber” が “estar+gerundio” によって表出されることは必ずしも不可能ではない。確かに、(34a) が示すように、その情報伝達が瞬時に行われるようなものが直接目的語になっている場合は、日本語の「知りつつある」の場合と同じく “estar sabiendo” による表出は難しくなるが、(34b) から (34d) の例は非文でないばかりか、対応する日本語も不自然ではない。これは日本語の「知りつつある」とスペイン語の “estar+sabiendo” の機能的類似性を示唆するものであるが、ここではスペイン語の “estar+sabiendo” に焦点をあて見ていく。

まず、(34b) は Gómez Torrego (1988) のあげた例で、通常 “estar+gerundio” による表出の難しい “saber” が当該事態の反復的生起を表す場合には同迂言形式による表出が可能になることを示しているが、その “saber” の反復的生起を保証しているのは不定複数形の直接目的語 *demasiadas cosas* (あまりに多くのこと) の存在と思われる。同様に、(34c) では主語が不定であることを示す再帰代名詞 se、また、(34d) では lo que という抽象概念を表す関係代名詞の存在が “saber” の反復的生起を保証していると考えられる。

さて、このような “estar sabiendo” の特徴は “saber” の時間構造というよりもむしろ “estar+gerundio” という迂言形式の機能によって説明されるものと考えられる。山村 (2000) によれば、“estar+gerundio” の機能は当該事態の activity 類化にあるが、この当該事態の activity 類化とは当該事態の成立の累積化のことを指すからである[13]。つまり、“saber” が “estar+gerundio” によって表出されるためには、その事態の累積的成立が保証されなければならないのだが、“saber” の直接目的語が不定の複数形であること、主語が se の示す不定であること、また、“saber” の直接目的語が限定性を欠く抽象概念を表したものであるということは、いずれも “saber” という事態の累積的成立を表すのに適したものと言えるのである。さらに、Morimoto (1998: 20) は “saber” が “estar+gerundio” によって表出されない例として “**Juan está sabiendo la verdad*. フアンは真実を知りつつある。” をあげていたが、本稿の検索によれば次のような例が確認された。

(35) a. (...) cada vez más gente está sabiendo la verdad.
(http://www.elotrolado.net /hilo_ministro-de-cultura-internet-es-mas-grave-que-el-top-manta_1130043_s150)
だんだん人々は真実を知りつつある。

b. «Al menos -dice- ahora estamos sabiendo la verdad».
(http://www.diariodeleon.es/noticias/leon/queremos-verdad-pide-familiadel-cabo-leones-victima-yak-42_162801.html)
「すくなくとも、── と彼女は言う ── 今私たちは真実を知りつつあります。」

これらの例も先に見た例と同様、gente という主語の不定性、また、「私たち」という主語の複数性を通し "saber" という事態の累積的成立が保証されたものと言える[14]。

6．結論に代えて

以上、日本語「知る」、スペイン語 "saber" のテンス・アスペクトの振る舞いを基に、いわゆる state 類事態に付与されてきた時間構造を再検討してきた。ここまで本稿が明らかにしてきたことを踏まえ、英語の "know"、日本語の「知る」、スペイン語の "saber" の時間構造を図示すると次のようになる。

(36) 英語 "know"、日本語「知る」、スペイン語 "saber" の時間構造

英語 "know"	:	(I)	_____ (F)
	I didn't know	ϕ	I know
日本語「知る」	:	I	_____ (F)
	「私は知ラナカッタ」	「私は知っタ」	「私は知っテイル」
スペイン語 "saber"	:	I	_____ (F)
	no sabía (imp.)	supe (ps.)	sé (pres.)

(36) の各言語の時間構造の中で共通するのは、英語 "know"、日本語「知る」、スペイン語 "saber" のいずれにおいても終結点が想定されていないという点である。これは「知らない」状態から「知った」への変化が起こった後の「知っている」という状態はその主語が当該情報を忘却しない限り維持されるということを示す。一方、英語 "know" にはその時間構造に開始点も想定されないのに対し、日本語「知る」、スペイン語 "saber" の時間構造に開始点が設定されているのは、英語の "know" と日本語「知る」、スペイン語 "saber" を区別する大きな違いである。(36) が示すように、日本語「知る」ではその完結相「知っタ」、スペイン語 "saber" ではその ps. が「知る」という事態の成立を表示するが、英語 "know" には ϕ という記号が示すように、"know" という事態の成立を表示するテンス・アスペクト形式が存在しない[15]。

次に、日本語「知る」とスペイン語 "saber" の時間構造の類似点と相違点について見る。上で述べたように、日本語「知る」とスペイン語 "saber" はその時間構造に当該事態の開始点（成立点）が設定されるという点で共通する。また、「知る」の「ル」形の否定は他の動詞の「ル」形とは異なり未来時に言及できず、"saber" の presente は他の動詞のそれとは異なり未来時に言及しにくいとい

う点も両者の共通点であった。これは「知る」と “saber” のいずれもがその意味において意図性が低いことを示唆するものであろう。さらに、「知る」、“saber” のいずれにおいても、１人称の主語がそのテンス・アスペクトの振る舞いに関与することが観察された。具体的には、「知る」においては、主語が「私」で「知る」の直接目的語が名詞節になるとき、その「ル」形は肯否ともに非文となった。同様に、“saber” においては、主語が「私」でその直接目的語が名詞節のとき、pres., ps., fut. の否定は非文となった。これらの現象は、「知る」、“saber” という事態の成立がその直接目的語となる情報の獲得によって成立することを意味するものである。

一方、テンス・アスペクトに関する日本語の「知る」とスペイン語の “saber” の相違点については、次のことが指摘できる。まず、日本語の「知る」では肯否の違いがそのテンス・アスペクトの機能に影響を与えるのに対し、スペイン語の “saber” にはそのようなことはないという点である。このことを図示すると (37) になる。

(37)　日本語「知る」、スペイン語 “saber” の肯否とその時間構造

日本語「知る」	:	I _____	(F)
	「私は知ラナカッタ」	「私は知っタ」	「私は知っテイル」
	「私は知ラナカッタ」	「私は知ラナカッタ」	「私は知ラナイ」
スペイン語 “saber”	:	I _____	(F)
	no sabía (imp.)	supe (ps.)	sé (pres.)
	no sabía (imp.)	no supe (ps.)	no sé (pres.)

(37) によれば、日本語「知る」とスペイン語 “saber” の肯否とその時間構造の比較で顕著なのは、日本語「知る」の肯否のテンス・アスペクト形式の間にはずれが生じるが、スペイン語 “saber” の肯否の間にテンス・アスペクト形式のずれはないという点である。「知る」という事態が成立した後の結果状態を表す「知っテイル」の否定は「知っテイナイ」ではなく「知ル」の否定である「知ラナイ」になり、また、「知る」の成立を表す「知っタ」の否定は「知ラナカッタ」であるが、この形式は「知る」という事態が成立する以前の状態をも表示する。一方、スペイン語 “saber” の肯定のテンス・アスペクト形式と否定のテンス・アスペクト形式の間にそのようなずれは見られない。

また、「知る」と「ツツアル」「ツツアッタ」、“saber” と “estar+gerundio” の関係も看過できないだろう。「ツツアル」「ツツアッタ」、“estar+gerundio” のどちらも一般に当該事態の過程を表すと言われているが、これらの形式と共起した「知る」、“saber” が意味するところは異なっている。日本語の「知りツツアル」「知りツツアッタ」が可能な文は、その「知る」の時間構造に成立点が存在し、当該事態がその成立点に到達する過程にあることを示すものであるが、スペイン語 “saber” の “estar+gerundio” による表出が可能な文は、“saber” 自体の時間構造というよりは、むしろ “estar+gerundio” という迂言形式が持つ当該事態の累積的成立の表示という機能の “saber” に対する応用を示すものであったからである。

しかしながら、以上の “know”、「知る」、“saber” の時間構造はその大枠に過ぎない。「知る」および “saber” の振る舞いを通し、これらの動詞のテンス・アスペクト形式の文法性には、直接目的語の種類や主語の指示対象といった当該事態を構成する諸要素が密接に関わってくることを見たからである。

最後に、本稿が最初に掲げた「語彙アスペクトの分類は普遍的か」という問題に対する回答を述

べておこう。それは次のようになる。少なくとも従来 state 類に分類されてきた英語 “know” に対応する日本語の「知る」とスペイン語の “saber” のテンス・アスペクトの振る舞いを見る限り、その時間構造には当該事態の成立点（開始点）が存在すると言わざるをえない。このことは state 類事態の時間構造には開始点も終結点も存在しないというこれまでの語彙アスペクト論に対する反論であり、state 類事態の時間構造の普遍性を問うものである。また、日本語の「知る」、スペイン語 “saber” のテンス・アスペクトの振る舞いを通し、同じ一つの動詞に基づく事態であっても、その主語、直接目的語の性質によりその時間構造のあり方は大きく異なってくるのも見た。このことは、先行研究も指摘するとおり、語彙アスペクトを扱う際には動詞以外の要素の性質に十分注意を払う必要があることを示すものである。さらに、今回の結果は “know” に対応する「知る」、“saber” のテンス・アスペクトの振る舞いだけを扱ったものであり state 類事態の時間構造を語るには一般性に欠けるきらいもある。今後、語彙アスペクトの普遍性の妥当性を検証するには、以上の点に留意しながら、state 類事態はもとよりそれ以外の類の事態にも対象を広げ、それらのテンス・アスペクトの振る舞いを精査・分析していく必要があるだろう。

注

* 本稿は2014年９月２日、静岡県ヤマハリゾートつま恋で開催された日本スペイン語学セミナー（SELE2014）において「日本語「知る」とスペイン語 “saber” の比較対照 ── 語彙的アスペクト・文法的アスペクト・テンスの観点から ──」という題目で発表したものを修正・加筆したものである。発表時、貴重なご意見、ご批判を下さった方々に深く感謝の意を表したい。ただし、本稿中の誤りおよび不備な点はすべて筆者の責任である。なお、紙幅の関係で本号に掲載するのは本稿の後半部分、すなわち、５.「知る」、“saber” に特有の振る舞い：テンス・アスペクトに注目して、６. 結論に代えて、である。本稿の前半部分である、１. はじめに、２. 先行研究における state 類事態の解釈、３.「知る」と “saber” の位置づけ、４.「知る」と “saber” に共通に見られる現象、については「「state 類事態の時間構造」再考 ── 英語 “know”，日本語「知る」，スペイン語 “saber” の対照研究 ──（上）」として『言語文化論究』No.34の pp.53-66に掲載されている。

1 ただし、５. ２. ２. で触れるように、スペイン語 “saber” の１人称の ps. の否定には肯定には見られない特筆すべき特徴がある。

2 google の詳細検索（言語：日本語、地域：日本、アクセス日2014/11/7）によれば「しか知っていません」は89例、「しか知りません」は108例、「何も知っていません」は49例、「何も知りません」219例であった。ただし、この検索では主語の人称は考慮に入っていない。また、「その先生しか知っていません」のように「しか」が主語に係る場合も含まれている。

3 「知っテイナイ」と完了性の関連については久野・増永（1983）、大浦（2002）にも指摘がある。

4 google の詳細検索（言語：日本語、地域：日本、アクセス日2014/11/7）によれば、「を知っていませんでした」のヒット数は112例、「を知りませんでした」のヒット数は278例だった。

5 久野・増永（1983）によれば、「知っテイナイ」の制約解除は、(i)「知っテイル」と並置され、肯定・否定の対象を表すとき、(ii) 条件文の「... ケレバ」が付加されたとき、(iii)「... クテハ」「... クテモ」、推量形「... カロウ」が付加されたときにも起こる。特に、(ii) の場合には「知っテイナイ」が義務的となり、「知ラナイ」を用いると「知るようにならなければ」の意味になると言う。本稿はまず文末に出現する「知る」のテンス・アスペクトの振る舞いの解明を目的と

したので、これらの場合については扱わなかった。Cf. 久野・増永（1983), p.116.

6 「まだ」のこのような解釈については金水（2000）を参照されたい。

7 Cf. 久野・増永（1983），大浦（2002）.

8 「テイル」形の「現象描写的」機能については、同形式と「エビデンシャリティ」との関係を論じた定延（2006）を参照されたい。

9 一方、非過去形の「知ラナイ」に対応するスペイン語は “saber” の pres. だけである。これは3．1．で見たように、「知ラナイ」は「知ラナカッタ」とは異なり継続相の意味しかないということを示している。したがって、「知っテイナイ」が「知っテイナカッタ」のように継続相の意味を引き受ける必要はない。

10 本稿の実施した CREA による no lo supe の検索（対象国：スペイン、対象ジャンル：すべて）結果によれば、ヒット数15例のうち、（31b”）のように解釈上 “saber” が成立したことを表すものは11例、“saber” の未成立を表すものは４例だった。

11 しかし、“Yo no supe qué hacer. 私は何をすべきか知らなかった ” のように、no supe の直接目的語となる部分が疑問詞を含む従属文の場合はこの限りではない。

12 “saber” の imp. の否定が、ps. の否定とは異なり、当該情報の獲得の成立・未成立を問題にはせず、現在当該の情報を獲得している発話者が過去のある時点でそれを獲得していない状態であったことを表しているだけということは、例えば、次のような会話でしばしば確認できる。

A: ¿Sabes que Taro va a casarse con Hanako ? あなた太郎が花子と結婚するの知ってる ?

B: No, no lo <u>sabía</u> (imp.). いいや、知らなかった。

A の質問に対する B の応答の中で用いられた *no lo sabía*（私はそれを知らなかった）は、「私」が A の話を聞くまで「太郎が花子と結婚する」という情報を知らない状態であったことを表している。因みに、この同じ文脈で no lo supe という “saber” の ps. の否定を用いることはできない。なぜなら A の話によって「私」は「太郎が花子と結婚する」という情報を獲得したからである。

13 ここで言う「当該事態の成立の累積化」とは、例えば、He was running は He ran（*e*）という出来事が累積（反復）されたことを表すということである。これを記号化すると、He was running = (*e*1) + (*e*2) + (*e*3) + ... (*e*n) になる。

14 Cuartero Otal y Horno Chéliz（2011: 240）は “Max está sabiendo la verdad” を文法的な例文としてあげ、さらに、当該文は “(...) focaliza la progresión de la fase subeventiva previa al estado（状態に先行する下位イベント的段階の進行に焦点をあてている）” と述べている。

15 google の詳細検索（言語：英語、地域：アメリカ合衆国、アクセス日2015/3/26）で、日本語の「いつ知っタか」、スペイン語の “saber” の ps. による表現 “cuándo supiste あなたはいつ知ったか ” に対応する “when did you know” を検索してみると、かなり多くヒットする。しかし、それらのほとんどは “know” の直接目的語として従属文を取るもので、「アドレス」や「ニュース」といった名詞を直接目的語として取るものは１例もなかった。その理由は、「アドレス」「ニュース」といった情報の獲得を表す際、英語では “get” “find out” “learn about” といった “know” 以外の動詞の過去形を用いるからである。

参 考 文 献

Butt, J. & Benjamin, C. (1994[2]): *A New reference Grammar of Modern Spanish*, London: Edward Arnold

Cuartero Otal, J. y Mª. del Carmen Horno Chéliz (2011): “Estados, estatividad y perífrasis”, en Cuartero Otal, J., L. García Fernández y C. Sinner (eds.) *Estudios sobre perífrasis y aspecto,* 225-248, München: Peniope.

Gómez Torrego, L. (1988): *Perífrasis verbales*, Madrid: Arco/Libros, S.A.

Morimoto, Y. (1998): *El aspecto léxico: delimitación*, Madrid: Arco/Libros, S.A.

Smith, C. (1991): *The Parameter of Aspect*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

——— (1999): “Activities: States or Events ?”, *Linguistics & Philosophy* 22, 279-508.

Vendler, Z. (1967): “Verbs and Times”, *Linguistics in Philosophy*, 97-121.

Westfall, R.E. (1995): *Simple and Progressive Forms of the Spanish Past Tense System: A Semantic and Pragramtic Study in Viewpoint Contrast*, UMI Dissertation Services.

大浦　真（2002）:「瞬間動詞「知る」の振舞」『京都大学言語学研究』21, 187-216.

奥田靖雄（1977）:「アスペクトの研究をめぐって ── 金田一的段階 ──」『国語国文』 8（宮城教育大学）

金水　敏（2000）:「1　時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』3-92, 岩波書店

金田一春彦（1950）:「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63.

工藤真由美（1995）:『アスペクト・テンス体系とテクスト ── 現代日本語の時間表現 ──』ひつじ書房 .

久野　暲・増永喜代子（1983）:「「知ラナイ」と「知ッテイナイ」」久野暲（著）『新日本文法研究』大修館書店, 109-116.

定延利之（2006）:「心内情報の帰属と管理－現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」中川正之・定延利之（編）『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版, 167-192.

山村ひろみ（1998）:「Smith（1991）のアスペクト理論とスペイン語の pretérito」『独仏文学研究』第48号 , 135-150.

——— (1999):「スペイン語の imperfecto と時間的限定性」『言語文化論究』No.10, 11-32.

——— (2000):「estar+gerundio の記述と考察（下）」『独仏文学研究』第50号, 7-28.

資　料　体

Real Academia Española: Banco de datos (CREA) [en línea]: Corpus de referencia del español actual http://www.rae.es [de julio a noviembre de 2014]

Reconsideración sobre la estructura temporal de los predicados estativos

— estudio contrastivo del verbo inglés “know”, el verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber”— (Segunda parte)

Hiromi YAMAMURA

Este trabajo tiene por objetivo comprobar la validez de la estructura temporal de los predicados estativos afirmada en la mayoría de los estudios sobre el aspecto léxico a través de la investigación de los comportamientos tempo-aspectuales del verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” correspondientes al verbo inglés “know”. El resultado se resume como sigue:

- El verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” comparten las particularidades siguientes:

1. Tanto la forma verbal -TA del verbo japonés “shiru”, a la que se asigna generalmente el aspecto «concluso» en la lingüística japonesa, como el pretérito pertecto simple del verbo español “saber” denotan el surgimiento del cambio de “no-saber” al “sí-saber”. Esto sugiere que no es imposible poner el punto inicial en la estructura temporal de los predicados estativos que hasta ahora se afirmaba que temporalmente no poseen ni punto inicial ni final.
2. Ni la forma verbal -RU del verbo japonés “shiru”, a la que en la lingüística del japonés se asigna generalmente el tiempo «no-pasado», ni el presente del verbo español “saber” se refieren al futuro, en contra de lo que sucede con la mayoría de los verbos de dichas dos lenguas. De esto se deduce que tanto al verbo japonés “shiru” como al verbo español “saber” les falta la agentividad (la intencionalidad).
3. Tanto en el verbo japonés “shiru” como en el verbo español “saber”, el sujeto de la primera persona y los significados del complemento directo afectan mucho sus comportamientos tempo-aspectuales.

- El verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” son diferentes en que en el verbo japonés “shiru” no existe paralelismo completo entre la función de las formas verbales afirmativas y la de las formas verbales negativas, mientras que en el verbo español “saber” sí existe.

- Según el resultado de esta investigación, las estructuras temporales del verbo inglés “know”, el verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” se ilustran como sigue:

el inglés “know”: .....(I) _____ (F)

I didn’t know ϕ I know

(I found out/I learned)

I didn’ know I don’t know

el japonés “shiru”: ..... I _____ (F)

shirANAKATTA(no sabía) shitTA(supe) shitTEIRU(sé)

shirANAKATTA(no sabía) shirANAKATTA(no supe) shirANAI (no sé)

el español“saber”: ..... I _____ (F)

no sabía supe (ps.) sé(pres.)

no sabía no supe (ps.) no sé (pres.)